



宮本文昭／東京シティ・フィル



アレクサンドル・ラザレフ／自フィル

夕

オーケストラ
広島交響楽団（第347回）

3月13日・広島文化学園HBGホール
●市野あゆみ(D) ●ピーター・ウ
ォーロック《キヤブリオル組曲》(弦
楽合奏版)、モーツアルト「ピアノ協
奏曲第17番」、交響曲第41番《ジュピ

良さがあれば、もっと感銘深い演奏にならなかったろうと思われたのが残念。とは言え、デスピノーサのオーディオストラをまとめる手腕はなかなかのものと見た。

今日の定期は「フィンランダ」の名オルガン奏者キヴィニエミが来日。前半のブーランクの協奏曲のソロを務め、さらに後半のメンデルスゾーンでもオルガン・パートを担当した。

オーケストラ
東京ニユーシティ管弦楽団
(第98回)

るが、これはこれで清新な演奏。オーケストラもまずまずまとまりよく、「寧なサポートぶりを聴かせた。
一方のシベリウスは、手堅くカッ
チリとまとめられている中に、熱く

3月13日・兵庫県立芸術文化センター
●ガエタノ・デスピーノーサ(指揮)、
リーズ・ドゥ・ラ・サール(口)●ラ
ノマニーノ「ピアノ協奏曲第3番」、
シベリウス「交響曲第2番」
イタリアの指揮者ガエタノ・デス
ピーノーサは定期には初登場だが、1
年ほど前に当楽団の名曲コンサート
と共演済み。その時はベートーヴェ
ン・プログラムだったが、今回はロ
シアと北欧の作品でまとめられてい
た。ラフマニノフでの独奏者リー
ス・ドゥ・ラ・サールは、滅法巧い。
明快な美音と安定したテクニックで
見事なまで軽快に弾き上げた。もう
少し重量感や骨太さが欲しい気もす

オーケストラ
兵庫芸術文化センター管弦楽団（第77回）

今宵は、「絆（アンサンブル）で奏
でる音楽の力」と題し、安永徹をコ
ンサートマスターに迎え指揮者なし

かした好企画といえる。

の中で、純化された音楽の思想が堅牢な構築となつて姿を現した。第1樂章では深い哀しみがその造形に刻みこまれ、音の密度がじよじよ

で演奏された。弦楽合奏版の一曲目は、指揮者なしとは言え、音の出やアーティキュレーションが揃い、全6曲の舞曲の特徴を上手く表現していた。強奏部でも弱奏部でも響きが美しく、しつとりした抒情や軽快さに、郷愁を誘う穏やかさや落ち着きがあった。

ピアノの市野は、楽譜を見ての演奏だったが、音色が美しく才気張る表現力があった。ただオーケストラをリードしたかったのか、やや速くなるのが惜しまれた。もう少し落ちていて歌つてもよかつたのでは。オーケストラが彼女の動きをよく見て上手く合わせていたのだから。

だけでは洒落た魅力作の多いノーランクとしては例外的に真摯で重厚な響きも聽ける力作。キヴィニエミはさすが名手として知られるだけに多彩で變化に富んだ楽想を縱横無尽に描き切り、内藤も好サポート。

後半の『賛歌』は盲頭の素朴で野太いトロンボーンの音をはじめ、ブルックナーを想わせる質実剛健で力強い演奏。内藤などとブルックナーノの珍しい版の世界初演などで知られるが、この日のような演奏を聴くと意外な実力者といえる。内藤の誠実で街いのない指揮によりオーケストラや合唱團の状態も非常に良く、樂しく快活な名演が展開されていた。

オーケストラ
東京都交響楽団
(第784回定期Aシリーズ)

3月18日・東京文化会館●エリア
フ・インバル(指揮)●ワーグナー
『トリスタンとイゾルデ』より「前奏曲」
と愛の死、ブルックナー「交響曲第4番
『ロマンティック』(「ヴァー
ク」: 1878 (80)

オーケストラ
関西フィルハーモニー管弦楽団（第263回）

曲と愛の死』「ブルッガナー」交響曲
第4番【ロマンティック】(ノヴァー
ク・1878(80))

清永は澄み切った、しかし輝きを抑えた音色でメンデルスゾーンの協奏曲を弾いた。表面的な感傷は姿を消し、深い哀しみを静かに引き出す。オーケストラもソロの流れを的確に受け、内省的な響きで応えだが、「これは次のフルックナーへ最適の状態で引き継がれた。

だ。だが、その解釈は伝統路線とは大きく一線を画していった。《トリスタン》の「前奏曲」は、たっぷりと隈取りも濃厚に弦が歌い出し、そのあととの間が絶妙。純度高く完璧な音楽美が、フォルムが印象的だった。冒頭で示された克明な立体的造形美が、ブルックナーも含めて、当夜の演奏全体

飯守はこのアルツッカナ（第5番）に満を持して向き合ったのだろう。オーケストラは開始の瞬間から深い音色を放っていた。第一、第二楽章に頻繁に現れる低弦群のピツツィカートはあたかも天空にござまるよう響き、弦と管楽器群の交錯や融合の展開を効果的に誘導。弱奏と最強音での全奏との巧みな交替の反復

清永は澄み切ったばかり輝きを
抑えた音色でメンデルスゾーンの協
奏曲を弾いた。表面的な感傷は姿を

オーケストラ
関西フィルハーモニー管弦楽団（第263回）

曲と愛の死』「ブルッガナー」交響曲
第4番【ロマンティック】(ノヴァー
ク・1878(80))

だけでは洒落た魅力作の多いノーランクとしては例外的に真摯で重厚な響きも聽ける力作。キヴィニエミはさすが名手として知られるだけに多彩で變化に富んだ楽想を縱横無尽に描き切り、内藤も好サポート。

後半の『賛歌』は盲頭の素朴で野太いトロンボーンの音をはじめ、ブルックナーを想わせる質実剛健で力強い演奏。内藤などとブルックナーノの珍しい版の世界初演などで知られるが、この日のような演奏を聴くと意外な実力者といえる。内藤の誠実で街いのない指揮によりオーケストラや合唱團の状態も非常に良く、樂しく快活な名演が展開されていた。

み込まれ
沈潜した想いと祈りを描き出す。第3楽章のスケルツオですら哀しみの
翳に彩られていた。これらの経過を受けた終楽章がよりスケールの大き
いブルックナーの世界に結実したのは当然だが、飯守のタクトは単なる
宗教的な深み、に留まらず、世界の苦悩をも見詰める迫真力に満ちてい
た。好演である。